聴覚障害者及び視覚障害者のための大学

筑波技術大学ニュース

第 14 号　発行日：2009 年 12 月　www.tsukuba-tech.ac.jp

国立大学法人
筑波技術大学

平成 21 年度学生生活研究会について

学生委員会主催による平成 21 年度 筑波技術大学 学生生活研究会を、9 月 3 日 木曜日に天久保キャンパスにおいて、学長・理事・副学長の外 本学教員 74 名及び事務職員 17 名の参加により実施しました。

本学生生活研究会は毎年 学生の教育及び生活への適応、人間形成として行われる課外活動の指導・助言及び学内秩序の維持等の諸問題について、関係教職員間で共通認識を持つことにより、よりきめ細かい日常業務の推進を図り、学生生活体制の円滑な運営に資することを目的としているものです。

● 平成 21 年度の基調テーマと目的

本年度の基調テーマとして、『学生の問題解決能力等における実態と育成について』を取り上げました。

本学が 4 年制大学となり、今年度で 4 学年の学生が揃いました。本学の場合、視覚あるいは聴覚に障害がある学生が全国から入学してきます。また、その障害の程度及び状況は各学生個々に異なります。その中で学生達は、いろいろな多様性を認め合い、互いに社会性を学んでいきます。

他大学でもみられる傾向ですが、最近では一概に大学生と言っても、自分自身で一人の人間として問題を解決する能力、自己判断する能力あるいは自己責任を持つ能力が未発達の学生が散見されるようになりました。特に、新入学の時期、また初めて体験する単位制での授業、期末試験等による戸惑いが見られます。また、卒業を控えた学生では、就職し社会に出るまでに意識の確立を行い、社会性に基づく、大学生としての基礎能力を身につけることが求められています。

そこで、大学として、教職員としてこのような現状を正確に把握するとともに、共通認識を持ち、高等教育機関としての指導について考える必要があります。

● 実施内容

研究会は村上学長からの挨拶の後、元本学 保健管理センター長で精神科医の深間内文彦先生を講師に迎え『「こども」から「おとな」への橋渡し－発育・発達・成長へのまなざし－』をテーマに講演をいただき、学生の未発達の状況の認識方法や、受け入れについての示唆に富んだ内容についてお話しいただき、活発な質疑応答がありました。

深間内先生による基調講演

分科会における討議

午後からは学部別及び学部共通の計 3 つに別れて分科会を行いました。今年度はこの分科会を 2 つの時間帯に分けたことにより、学部を越えた討論が図られ、両キャンパス教職員の共通認識を深めることができました。分科会は基調テーマを含め、次のテーマで話し合いがもたれました。

(1)「学生の問題解決能力等における実態と育成について」
(2)「薬物使用や悪質勧誘等の防止指導について」
(3)「学生のモラル向上と規則違反等における指導について」
(4)「学生課外活動、地域活動と学外における事故、犯罪等への対応について」
(5)「感染症対策と寄宿舎生活での対応について」

分科会終了後に、小野副学長から今回の研究会についての総評が述べられ閉会となりました。閉会後は、天久保キャンパス食堂において「懇親会」が設けられ、さらなる交流が図られました。

● 今後について

本学生生活研究会では、現在の学生気質、また学生生活状況を把握、理解するとともに、教職員相互に共通認識を持ち、個々の教職員がそれぞれの課題を真摯に捉え、学生に向き合っていく姿勢が確認できたように思います。

主催者の学生委員会として、今回の研究会で見出された課題を整理して行くとともに、このような状況に相応した、教育、教務と密接に連携できるような学生生活支援体制を検討していきたいと考えています。

学生委員会 委員長
産業技術学部 産業情報学科　教授　須田　裕之

第二回障害学生支援大学長連絡会議を開催

開会の挨拶をする村上学長

平成 21 年 10 月 20 日、全国から 11 の大学の学長、副学長などトップの方々にお集まりいただき、昨年に続き二回目の“障害学生支援大学長連絡会議”が、本学春日キャンパスで開催されました。この会議は、“高等教育におけるユニバーサルアクセスを実現するために、障害学生支援に関する情報を共有し、大学間の連携・協力”を図ることを目的としたものです。

参加いただいた大学は、国立大学法人、私立大学、総合大学、単科大学など、大学の設置形態や規模、教育対象も様々ですが、障害学生の支援を正面からとらえ、より良い学習環境や支援体制の整備を目指しています。

会議は、本学村上学長の挨拶から始まり、宮城教育大学及び四国学院大学の事例紹介、更に、各大学の現状の紹介と進みましたが、紹介後、発達障害への対応について、質問が出され、この問題に対する関心の深さ、別の言い方をすれば、対応の難しさ、が協議に先立って提示された形になりました。

引き続いての協議では、昨年度の会議のテーマとなった、障害学生・支援学生それぞれの成長支援、財政の問題などを踏まえ、(1) 支援の考え方、(2) 支援担当者、(3) 支援の経費の三項目に焦点を絞り、議論を行いました。

● 支援の考え方

さて、支援の考え方（支援ポリシー）は、それぞれの大学が目指しているところ等により、異なりますが、しかし、全く個々バラバラということでもありません。多くの大学に共通するキーワードを挙げると、一つは健常学生と障害学生の公平な修学環境の構築、第二に教育を受ける権利の保障、第三に障害学生、支援学生、更には、両学生の周りにいる一般学生の自立的成長の支援、等があります。

障害学生の支援というと、講義保障や障害者用トイレの設置などが、すぐ頭に浮かびますが、第一に、大学全体として、障害学生をどのように考えるか、障害学生にどのように対するかという基本的考え方が必要で、上に挙げたキーワードがそれらに対応します。

また、受け入れだけではなく、教育し、社会に出すという大学の役割を踏まえた時、キャリア支援や地域との連携も必要との意見が示されました。

本学の視覚障害補償機器を見学する出席者

● 支援担当者

支援担当者については、支援担当職員と支援学生とについて、議論がありました。支援担当者或いは学内の支援体制には、大学毎に、様々な取り組みがあり、支援室を設置している大学と、学務・学生課で対応している大学、専任の職員を配置している大学と課職員が対応する大学などが紹介されました。それぞれに一長一短があり、専任職員（往々にして契約職員）の安定した雇用や、課職員の対応スキルの向上などの問題が提起されました。

支援学生については、どの大学でも、①支援に必要な、かつ安定した人数の確保、②スキルの維持・向上、③支援へのモチベーションの持続などについて課題を抱えているようです。また、支援担当職員と支援学生との役割分担や、支援の考え方とも強く関係しますが、支援における大学と地域とのコミュニケーション作り、その中での学生の役割なども、話題に上りました。大学のあり方にも関係するこれらの議論は、今後益々大きな意味を持ってくると思います。

● 支援の経費

支援に係る経費については、大きく二つに課題を分けることができます。一つは、大学の規模が小さく、十分な予算をつけられない大学について、他は、現在は、多額の予算を得ているが（文部科学省学生支援 GP などにより）、期限が切れた時の対応についてです。

現在の予算により、ハード部分を集中的に改修したり、教員や学生一人一人が、できる範囲でサポートするという心の支援を充実させることによって、対応を図っていくことになりますが、何れにしても、財源の安定的確保は、この分野において、多くの大学が抱えている課題であり、今後もこの会議で、意見を交換し、必要な対応を取っていくことが重要です。

● 今後の課題

前述の通り、障害学生の支援は、講義の情報保障だけに留まるものではありません。障害学生に分かりやすい授業は、健常学生にもわかりやすいものとなります。障害学生に安全なキャンパスは、教職員を含めた、大学で活動する全ての人々に安全な大学でもあります。つまり大学全体として、様々な部分で障害学生を支援することが必要であり、この事により、大学そのものも新しい可能性をつかみ得ると考えています。ですから、“大学長による理解と強い指導力”がどうしても必要になるのです。今後、更に多くの大学から学長にご出席いただき、議論の輪に加わっていただきたいと思います。

特命学長補佐（学生支援 SD 担当）　石田　久之

新学生寄宿舎が完成

4年制化に伴う学生定員の増加に対応するための新しい寄宿舎が完成し、本年9月28日に文部科学省など関係者のご臨席をいただき竣工式を行いました。翌日には学生の入居が始まり、本年4月から1～4年次が在学するなか、2学期から新しい寄宿舎の体制を整備することができました。

新学生寄宿舎竣工式（天久保キャンパス新寄宿舎前）

● 新寄宿舎建設の経緯

4年制化がスタートした2006年、キャンパス整備計画担当の特命学長補佐のもと、聴覚障害系天久保キャンパス、視覚障害系春日キャンパスのそれぞれで、教員による新寄宿舎検討ワーキンググループ（WG）が発足し、障害の特性に配慮した新寄宿舎の検討が始まりました。この間、学生へのアンケートやヒアリング、教員の全学学生生活研究会での検討、他大学の寄宿舎調査を行い計画案を作成、2007年には文部科学省に建設のための概算要求を提出しました。

国の財政事情が厳しく、他大学では新たな寄宿舎建設の予算措置がなされない中、特別に障害学生教育に配慮した措置がされました。当初の計画案から国の寄宿舎建設基準にそった建設予算となり、改めて新寄宿舎検討WGと建設会社により2009年3月竣工に向け実施設計が検討されましたが、建築資材の急騰や予算対応などから計画が遅れ、2009年1月に着工することができました。

● 天久保キャンパス新寄宿舎（聴覚障害系）の概要

学生が安心して勉学に集中し生活ができる、聴覚障害に配慮した学生寄宿舎として、従来からある寄宿舎に隣接して36戸分が建設されました。特に防犯と情報保障のための新たな仕組みを導入しました。特徴は以下の内容です。

各階の談話スペースと廊下

個室

(1) 女子専用棟個室タイプ（個室内に空調、ミニキッチン、冷蔵庫、電子レンジ、机、収納などを設置）
(2) ICカード入退室・来訪者外部コミュニケーションシステム（1階出入りにはICカードを使用、来訪者には個室で画像確認をし、文字と音声で対話できるシステム）
(3) 災害通報・防犯システム（各階廊下には非常時に警報ランプ・警報音と文字表示、屋外に防犯カメラ設置）
(4) 個室内の情報保障機器（非常時や来訪者に対して、光と振動による合図システムを設置）
(5) 1階に全女子寮生専用の浴室・シャワーを設置

● 春日キャンパス新寄宿舎（視覚障害系）の概要

学生が安心して生活ができる、視覚障害に配慮した学生寄宿舎として、従来からある寄宿舎に隣接して35戸分が建設されました。特にバリアフリーと情報保障のための新たな仕組みを導入しました。特徴は以下の内容です。

(1) 女子専用棟ユニットタイプ（個室6戸に、台所、冷蔵庫、電子レンジ、テーブルを備えた補食室、バス、トイレ洗面所などからなるユニットを設置）
(2) 音声案内システム（寄宿舎事務室と遠隔で会話し案内を受けることができるシステム）
(3) ICカード入退室システム（1階入口ドアはICカードで解錠、来訪者は個室とインターホンで会話し、個室から入口ドア解錠ができるシステム）
(4) 災害時避難誘導システム（災害時に避難経路を光で誘導する光る点字ブロックシステム、蓄光式案内標識）
(5) 個室内情報保障機器（共用スペースに点字表示・音声読み上げ対応のパソコン、拡大読書器、点字プリンタ、立体コピー機などを設置）
(6) 各ユニット内に浴室（ユニットバス、シャワー設置）
(7) エレベータ設置（音声ガイド、点字表示）

春日キャンパス新寄宿舎

談話コーナー設置機器

1990年に筑波技術短期大学として新入生を迎え、両キャンパスで学生寄宿舎が使用され始めて約20年が経過しようとしています。新寄宿舎が新鋭の設備で完成したことに対して、ご支援いただいた方々に深く感謝いたします。今後、さらに学生が安心して学び、学生生活をすごすためには、従来の寄宿舎の老朽化やバリアフリー化などへの対応が課題となっています。

施設環境防災委員会委員長
産業技術学部 総合デザイン学科　教授　金田　博

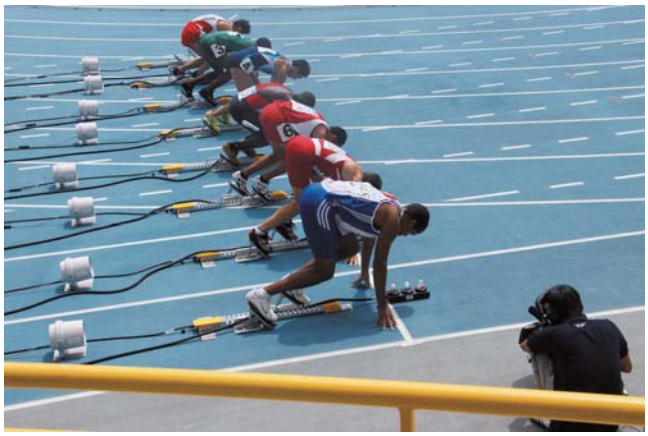
台北デフリンピックに産業技術学部の学生３名が出場

● はじめに

平成 21 年 9 月 5 日より 15 日まで、台湾・台北市にて第 21 回夏季デフリンピックが開催され、本学からも教員 1 名と学生 3 名が日本選手団のメンバーとして参加しました。

● ろう者のオリンピック

デフリンピックは 1924 年からの歴史を持つ、ろう者のための国際競技大会であり、競技に出場する条件は補聴器をはずした裸耳状態での聴力損失が 55 デシベルを超えていること、そして試合時は補聴器を装用しないということです。



スタート合図を光の点滅で示す装置

また、スタートや審判の合図などを光の点滅で示す装置が開発されており、陸上競技、水泳競技、バスケットボール競技などで使用されています。聴覚障害を補償するための工夫がされている以外は、一般競技と同じ規則で競技が運営されていることもデフリンピックの特色です。

● 産業技術学部学生の活躍

台北デフリンピックには 77 カ国から約 2,500 名の選手が参加しましたが、日本選手団は 154 名の選手を派遣し、金 5、銀 6、銅 9 と、合計 20 個のメダルを日本に持ち帰ることが出来ました。これは過去最高記録と並ぶ数であり、また国別に見ますと南アフリカに続く第 9 位となっています。

本学からも、産業技術学部から 3 名の学生が選手として出場しましたので紹介します。

全員がデフリンピック初出場です。

・木下　徹（産業情報学科 2 年次）水泳競技：
　50M 平泳ぎ 38 名中 12 位、100M 平泳ぎ 31 名中 12 位、200M 平泳ぎ 28 名中 10 位、50M バタフライ 47 名中 21 位、200M 個人メドレー 38 名中 25 位、400M メドレーリレー失格

・河野　翔（産業情報学科 2 年次）サッカー競技（男子）：
　16 チーム中 12 位

・菅谷　美穂（総合デザイン学科 2 年次）バレーボール競技（女子）：7 チーム中 3 位

木下さんの感想

初めての世界大会に出場して学ぶことが沢山ありました。今回はＢ決勝に進出してベストタイムを出すことが出来ましたが、自分で設定した目標タイムには届かず自分としては満足していません。やっぱり、デフリンピックに出るからには、メダルを取らなければダメです。4 年後のアテネデフリンピックは、メダルを完全に狙える記録を作ってから臨む必要があります。今回のデフリンピックに出場するにあたって、沢山の方々から応援していただいたことをとても感謝しています。ありがとうございました。

河野さんの感想

試合の結果だけを見ると大変悔いの残る大会になりましたが、17 日間世界各国のろう者と交流して学ぶことが沢山ありました。日本のろう者は社会的弱者として自分を否定的に受け止めていますが、欧州のろう者は自然に自分の障害を受け入れており、非常に積極的な生き方をしているように見えます。自分はどちらかと言えば完全に自分の障害を受け入れてはいない方なので、デフリンピックに参加する中で、聴覚障害者という立場についてすごく考えさせられました。それから、聴覚障害者同士でレベルの高い試合を戦えたこと、音という壁がなくフェアプレー精神に則った試合が出来たことは素晴らしい経験でした。アテネデフリンピックに向けて更に練習して、また代表に選出されたいと燃えています。

菅谷さんの感想

台北デフリンピックに参加して、日の丸の重さ…日本代表になった誇りを実感することができました。4 年間待ちに待った世界一のウクライナチームとの試合を戦って、世界のろうバレーのすごさを実感しました。金メダルではなく銅メダルでしたが、初めてのデフリンピック出場でメダルを取ることができて、4 年間苦しんで練習してきたことが形となって報われた思いです。また、デフリンピックに参加したことで、聾者としての世界の視野が広くなり、聴覚障害を乗り越える自信が持てたようにも思います。今度は私がデフリンピックの良さを周りに伝えていきたいです。

サーブを放つ菅谷選手

本学卒業生も約 20 名が選手として、スタッフとして参加しており、今後もますますの活躍が期待されます。

（写真：及川力教授提供）

障害者高等教育研究支援センター　准教授　大杉　豊

● 理学療法サークル勉強会報告

合宿所にて患者役と理学療法士役になり
スリーマンリフトの練習をしている様子

「つくばケーシーズ」は平成18年に始まった理学療法学科（短期大学部）と理学療法学専攻の有志学生による理学療法について研究活動を行うサークルです。きっかけは、理学療法の実技を授業範囲を超えてもっと練習したいということからでした。年々その活動範囲は病院訪問、患者さんの屋外活動へのボランティア、心臓リハビリテーションの勉強会、学会見学など、学生の意欲と共に広がっています。しかし、常に変わらないことは先輩後輩の縦の繋がりを大切にし、理学療法士としての資質を養うために学生が自主的に『やってみたい』という好奇心を実現する機会になっていることです。

昨年から勝田病院の協力を得て合宿を始めました。今年は学生7名が参加。実技演習を重ね、実際の患者に触れる機会を得、学業として良い経験となりました。また、予想を超える貴重な経験をしたと顧問教員として感じたことがあります。それは、合宿を計画するところから3日間寝食を共にしてつくばに戻るまでに学生達が経験した、団体活動を企画すること、リーダーシップを発揮すること、互いを信頼する気持ちや思いやる気持ち、時間の概念を持つこと、自分の仕事を自分で見つけること、そして協調性を養う、という機会を得たことです。

つくばケーシーズ代表　理学療法学専攻2年次
田邉　裕基君の感想

私達、サークル「ケーシーズ」では、夏休み期間を利用し大洗海岸で2泊3日勉強合宿を行っている。この合宿は将来、理学療法士として医療の現場に立つ私達が、熱意を持ち自らを向上させていく事を目標に行っている。この合宿3日目には「勝田病院」での見学・体験学習を行った。2年次の「病院見学実習」に向けて様々な知識の習得、医療人としての心得を大いに学んだ結果となった。

今期合宿ではサークル顧問薄葉教授指導のもと、ROM（関節可動域訓練）やトランスファー（車椅子からベッドなど、様々なものへ、自ら又は介助によって乗り移る動作）の講義実習をしていただいた。講義指導後、自分たちの体を使い、正常な人体を覚える事から始めた。2日間の講義・実習後、勝田病院にて理学療法士指導のもと患者さんに実際に触れ、初めての貴重な体験と共に知識的にも人間的にも成長したと実感すると共に、我々の視覚障害を自らの熱意と行動力で自信へと繋げることができた。今後も障害に臆する事無く、今後のリハビリ医療をリードしていく様な、1ランク上の人材になることを目指し活動していきたい。そしてこの貴重な体験を今後も後輩が繋げていくことを強く希望する。

最後にサークル顧問薄葉教授、並びに関係者各位、協力頂いた病院の先生方、患者さんに感謝すると共に、今後もケーシーズの活動に協力頂けます様希望する。

先輩の理学療法士の指導のもと、
筋緊張亢進状態に触れている様子

勝田病院には筑波技術短期大学の卒業生が理学療法士として勤務していることもあり、視覚障害のある学生達の合宿への協力・理解に深く感謝申し上げます。

保健科学部 保健学科 理学療法学専攻　教授　薄葉　真理子

● 「アビリンピック2009」と「障害者ワークフェア2009」に本学が参加

平成21年10月30日から11月1日に開催された、第31回全国障害者技能競技大会（アビリンピックいばらき大会2009）に本学学生2名がDTP部門の茨城代表として出場しました。また同時に開催された障害者ワークフェア2009にもブースを出展し、本学での情報保障に対する取り組みをご紹介しました。

● アビリンピック2009を終えて

本学の産業技術学部 総合デザイン学科 視覚伝達デザインコース4年次の佐藤季司さんと、同3年次の佐原実歌さんがDTP部門の茨城県代表として出場しました。

10 月 30 日 金曜日 ひたちなか市文化会館で開会式、両選手は青い選手団ユニフォームを受け取り茨城県選手団として開会式に参加。その後、競技会場へ移動し、下見と共に競技についての説明がありました。DTP 部門の選手は総勢 15 名、そのうち聴覚障害者の 4 名に対しては手話による情報保障がありました。ただ DTP の専門用語が混じった手話通訳には限界があり、時々本学の選手が「Photoshop」や「Illustrator」、「ファイルの保存」、「プリントアウト」といった手話を、手話通訳者に教えてあげる場面がありました。後で競技説明の内容が確実に伝わっているかを両選手に確認すると、一部誤解している部分があり少々不安にさせました。確かに 2 人が教えた DTP 用語以外にも専門用語がいくつか出ており、それがうまく伝わらなかったのでしょう。2 人には WEB サイトで公開されている模擬課題をよく読むように指導しました。

真剣な面持ちで競技に挑む両選手

10 月 31 日 土曜日 ひたちなか市総合体育館での競技当日。前日の競技説明の「不安な伝達状況」に憂慮してか、主催者から競技開始前に課題文を読める配慮がありました。そして競技スタート。競技時間は午前 9 時から正午までの 3 時間、課題は美容院のチラシ。フォルダに入っている美容院 の名前、解説文、キャッチコピー、料金表、店舗住所などのテキストファイルと、写真素材を 1 枚の紙面にレイアウトを行う。両選手のライバルたちは明らかに年齢層が高い、つまりプロの DTP デザイナーと予想されます。その中で両選手がどれだけ善戦できるだろうか。私は遠巻きに応援、競技終了 15 分前、2 人の作品の出来が気になり、撮影用に持っていたカメラの望遠レンズで参加者のディスプレイをのぞいてみると、2 人の出来は意外と悪くない、むしろライバルたちより上品で頭一つ出ていたようにさえ感じました。そして競技終了。

11 月 1 日 日曜日 ひたちなか市文化会館で結果発表と閉会式。閉会式に参加した佐原さんからメールがあり、DTP 部門受賞者ゼロ、つまり残念ながら 2 人とも受賞ならず。敗因は彼らの作った物は「チラシ」ではなく「パンフレット」に近い物で、良くも悪くも「上品すぎた」というのが私の分析です。受賞は逃しましたが、デザイン的には合格点に達していたと思います。筑波技大生にとって一大イベントである学園祭を横目に、2 人はよく頑張り、また良い経験になったと思います。

テレビ会議システム（上）、視覚障害に対応した
パソコン（左下）、立体コピー（右下）

● 障害者ワークフェア 2009 に出展

競技大会と併せて、ひたちなか市総合運動公園（ひたちなか市新光町）を主会場に開催された障害者ワークフェア 2009 に 118 出展団体の一つとして本学も出展しました。期間は 10 月 30 日 13:00 ～ 17:00 と 31 日 9:00 ～ 17:00 です。今回は茨城県開催と言うことで主催者である高齢・障害者雇用支援機構と茨城県商工労働部から出展の依頼を受けて初めて出展しました。また高齢・障害者雇用支援機構からの要望を容れて競技会場の一つでもあるワークプラザ勝田会場（ひたちなか市東石川）に唯一本学がブースを設置し主会場のブースとハイビジョン規格のテレビ会議システムを、インターネットを介して常時接続しました。これは手話や雰囲気が伝わるツールとして紹介させていただきましたが、今回の様に複数会場での催しの一体感を演出するツールとして催事企画担当者からも関心をいただきました。主会場のブースは総合体育館内の C-3 区画で、ここは体育館の正面玄関を入ると直ぐ左側に位置し、最初に目に付く絶好の場所を割り当てられ、場所負けしないか心配でしたが、結果多く（本学推計で延約 3,600 人）の方々にお立ち寄りいただきました。

主会場ブースは、TV 会議システムの他に、視覚障害に対応した PC システムやカプセルペーパーを用いた立体コピー機、指文字練習ソフト、以上が体験可能なもので、本学に事務局を置く日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）の成果物と、本学の活動を説明した A1 判パネル 7 枚、本学の概要や紹介 DVD などの配布物 7 種を持ち込み展示又は配布しました。中でも立体コピーは子どもたちの歓心を得る展示となりました。県内の特別支援学校や一般校の児童・生徒にも多く訪れていただき、本学の名前は知っていてもなかなか実際の教材等を見る機会があるとは言えない中で、ブースという限られたスペースと時間ではありましたが貴重な交流ができました。

産業技術学部 総合デザイン学科 助教　永盛 祐介

筑波技術大学ニュース　第14号　　発行　筑波技術大学 広報室　　編集　筑波技術大学 総務課
発行日　平成21(2009)年12月　　〒305-8520 茨城県つくば市天久保4丁目3-15　　URL http://www.tsukuba-tech.ac.jp/
E-Mail kouhou@ad.tsukuba-tech.ac.jp　　Tel 029-858-9424　　Fax 029-858-9312